

東大生が
日本を100人の島
に例えたら



面白
い
ほど

経済学が
わかった!

東京大学工学系研究科博士課程

ムギタロー 著

駒澤大学経済学部
准教授

井上智洋

『MMT[現代貨幣理論]
がよくわかる本』著者

望月小真 監修

sanctuary books

はじめに

この本は一度読んだら「経済がわかる自分」になれる本です。

そんなはずはないだろう。

そう思うのも無理はありません。

きっと「経済がわかるようになりたいけどわからない」という方のほぼ全員が、これまでも一生懸命、経済の本を読んで勉強したつもりだけど、いまだに毎日流れている経済ニュースや、政治家たちが議論している内容がなんなのか、いまいちよくわかっていないのではないのでしょうか。

そんな方たちに伝えたいことがあります。

断片的に「インフレ」「金利」「景気循環」などの経済用語を知っていても、そんなに意味がありません。なぜならそれはスペースキーやリターンキーがなにをするものかわかっていても、「そもそもパソコンを使ってなにができるのか？」がわかっていないのと同じ状態だからです。

経済がわかりにくいのはなぜか？ それは話のスケールが大きすぎて、全体像が見えにくいからだと考えました。

そこでまずは経済を「100人が住む島」と想像してください。

そして、一気に、短期間でその仕組みを頭の中に入れてください。

そのまま、誰かに話してみてください。

そうすればきっと「経済がわかる自分」になれるはずですよ。

この本はみなさんを「経済がわかる！」ところまで案内します。

「経済がわかる」ところまで到達すると、毎日の暮らしの中で自然と「経済の話に目がいく」ようになり、自分の意見が湧き出てくるようになります。

たとえば、こんな国会答弁を聞いたらどう思われるでしょう。

「これからの日本は社会経済や産業構造を見直し、民間主導の経済成長を実現していくことが重要になる。財政出動はこれまでも経済状況を見極めた上で行ってきたが、一方で、国家の債務の持続可能性や財政運営に対する信認が失われれば、悪い金利上昇や過度なインフレを含め国民生活に重大な影響が及ぶことが懸念されるため、民需主導の経済成長の実現とともに歳入歳入改革の取組みを継続し、経済再生と財政健全化の両立を図っていくべきであり、消費税の引上げについては、全世代型社会保障制度への転換のために不可欠だ。国家財政の均衡化と両立できる範囲内で、中間層や低所得層への支援として雇用、収入、住まいの確保などの課題に対応したきめ細かな施策を講じていくべきだ。また、生産性を高める中で最低賃金の引上げを通じた賃金上昇を促すこともすすめたい」～参考文献(巻末)51より一部要約して抜粋

いままでは「ただの退屈な呪文」くらいにしか聞こえなかったかもしれません。

ところがこの本を読んだ後であれば、「なるほどそういう考えか」とあっさり理解できるだけでなく、「でもそうかな？ たしかに通貨は国家債務として計上されるけど、それは国の徴税権力にもとづいたものだから、実質的なリスクはほとんどないんじゃない？ 消費税は下げてもいいんじゃないかな」といった**自分の意見が自然と湧き出てくるのです。**

「経済が生活のなんの役に立つの？」と聞かれたら答えに困りま

すが、少なくとも私はこんなふうに「経済がわかる」ようになったとたん、世界がクリアに見えるようになり、経済ニュースの一つひとつに対して「面白い!」「次はどうなるんだろう?」とワクワクできるようになり、また世の中の出来事の一つひとつに「これが原因だろうな」「そりゃそうなるだろうな」と深く納得できるようになり、「日本はこうなっていくべきかも」とか「この政策はすごくいいな!」といった考えまで浮かぶようになりました。

そんな毎日は、いままでより一層「人類として生きている実感」を強めてくれます。

私と同じような感覚を、ぜひ皆さんにも味わってほしい。

そう思って、この本を書きました。

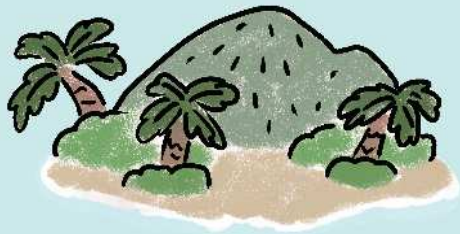
さあ 100 人の島とその住民たちと、一緒に経済の世界を楽しみましょう。

ご注意

「100人の島」という例えについて

- 「100人の島」は、とある「資本主義に基づく民主政治の法治国家」をデフォルメしたものです。
- あくまでも「お金と国の仕組み」だけにフォーカスして説明しています。
- よって、文中に出てくる人数・金額・時間などの数字は、「実際の数字」とは関連づけていません。
- また説明の流れは、「経済発展の歴史」に沿わせていません。
- 登場する動物の種類には、特別な意味を持たせていません。
- 日本銀行を「エン印刷係」、債券を「〇〇券」など、独自の言い換えをしています。

以上は、すべて「経済」から“わかりにくさ”を徹底的に排除するための著者なりの工夫です。ご理解の上お読みください。



CONTENTS

| | |
|----------------------------|---|
| はじめに | 2 |
| ご注意「100人の島」という例えについて | 5 |

CHAPTER

1



ケイザイ以前の話

| | |
|------------------|----|
| 言葉を使おう | 10 |
| 役割分担をしよう | 14 |
| どうやって分ける? | 16 |
| ルールとお金を作ろう | 20 |
| 政府と公務員を作ろう | 24 |
| 解説 | 30 |

CHAPTER

2



国家とお金

| | |
|----------------------------------|----|
| お金にはなぜ価値があるの? | 40 |
| お金の増え方（政府が発行する場合） | 48 |
| むかしの税といまの税 | 52 |
| お金の増え方（国債の場合） | 58 |
| 自分の財産ってなに? | 64 |
| お金の増え方 （民間銀行による信用創造の場合） | 68 |
| ぎりしゃ島の破産 | 76 |
| 解説 | 82 |

CHAPTER

3



国の役割と政府のお仕事

| | |
|-----------------|-----|
| 国の役割って？ | 98 |
| ルールの穴をふさごう | 104 |
| 政府の仕事ってなに？ | 108 |
| 政府にできること、できないこと | 112 |
| お金のバランスを取ろう | 116 |
| 解説 | 120 |

CHAPTER

4



景気と物価

| | |
|-------------------|-----|
| 値段の決まり方 | 132 |
| 物価の決まり方 | 138 |
| 物価を上げよう | 144 |
| 景気を良くしよう | 148 |
| ハイパーインフレーションってなに？ | 154 |
| 解説 | 160 |

CHAPTER

5



投機と債券

| | |
|------------|-----|
| 投機バブルってなに？ | 170 |
| 住民の債券ってなに？ | 176 |
| 金融危機ってなに？ | 182 |
| 株券ってなに？ | 190 |
| 解説 | 198 |

CHAPTER

6



貿易と為替

| | |
|-------------------|-----|
| 貿易をしよう（お金がない場合） | 206 |
| 貿易をしよう（お金がある場合） | 212 |
| 為替レートってどうやって変わるの？ | 216 |
| 通貨発行は為替にどう影響するの？ | 226 |
| 関税ってなに？ | 234 |
| 変動（固定）相場制ってなに？ | 238 |
| 島の力を強くしよう | 246 |
| 解説 | 250 |

CHAPTER

7



課題と未来

| | |
|-------------|-----|
| 国のシステムってなに？ | 258 |
| 資本主義の課題 | 262 |
| 持続可能にしよう | 266 |
| 理想の主義ってなに？ | 272 |
| 大切なもの | 276 |
| 解説 | 280 |

| | |
|------|-----|
| おわりに | 291 |
|------|-----|

CHAPTER

1

ケイザイ以前の話

BEFORE ECONOMY



CHAPTER 1

1 言葉を使おう

チンパンジー 100 匹が無人島に流れ着き、暮らしをはじめ。
ヒト 100 人が無人島に流れ着き、暮らしをはじめ。
ふたつの暮らしの違いを決定づけるものはなんですか？

答えは「言葉」です。

チンパンジーは、1 匹 1 匹が思い思いにエサを探し集めて、自給自足で暮らさなければなりません。

それにひきかえヒトは、

A 「私は家を作る」

B 「私は水を探す」

C 「私は食料を調達する」

D 「私はオオカミが来ないか見張りをする」

というように、「言葉」を使って簡単に役割分担することができます。

さらに、手に入れた家や水や食料を、「言葉」を使って分配することができます。

もしもオオカミが出なかった場合、D さんはただ立っただけ、ということになります。

チンパンジーであれば、ただ立っていただけのDさんに、手に入れた家や水や食料を渡すことはないでしょう。

しかしヒトはその仕事の大切さを「言葉」で共有し、理解もできているので、Dさんに水や食料を分配しても不満は出ません。

ヒト



言葉が使える



役割り分胆できる

チンパンジー



言葉が使えない



役割り分胆できない

ヒト

1世代目



天才が金貨の製法を發明!

2世代目



鉄の製法を学び、電気を發明!

3世代目



金貨の製法や電気を学び、電球を發明!

?世代目



様々な知識を学び、スマホを發明!

知識の継承 ➡ 技術の発展

キンパンジー

1世代目



天才が金貨の製法を發明!

2世代目



金貨の製法が失われる

3世代目



特になし

?世代目



天才が金貨の製法を發明!

知識の継承が出来ない

さらにヒトには「言葉」があるから、知識を継承することもできます。

誰かが何十年もかけて鉄の作り方を発見すれば、次の世代は、何十年もかけて試行錯誤をしなくても、鉄の作り方を「言葉」で学ぶことができます。

すると次の世代は、その「鉄の作り方」をベースとして、さらに新しい技術を生み出すことができます。

何千年もかけて人類が積み重ねた知識を継承してきたから、いま私たちは、スマホのようなすさまじいテクノロジーを手に入れています。

もしも無人島で知識ゼロからスマホを作ろうと思ったら、何千年もかかってしまうのです。

このようにヒトは言葉によって、「役割分担」をし、「物資の分配」をし、「知識の継承」をしながら発展してきました。

これがヒトの強みです。

そして、ここからケイザイがはじまっていきます。

その単純にも複雑にも見える不思議な仕組みについて、これからどうぶつたちの住む「100人の島」で一緒に考えていきましょう。

CHAPTER 1

2

役割分担をしよう

想像してみてください。

ここに 100 人が住む島があります。

住民たちは一人ひとりが自給自足しているのではなく、みんなで協力して、役割分担をしながら暮らしています。



100 人が生きていくために、必要なものが 3 つあります。

それは食料・モノ・サービスです。

これらを作るために、みんな働いています。

10 人は農家です。

彼らは「食料×100」をつくることができます。

「食料×100」があれば、

島の 100 人は飢えずに生きていけます。

40人は職人です。

建物・家具・服・日用品などのモノを作っています。
40人の職人がいれば、生活必需品×100を作れます。

50人はサービス業です。

髪を切ったり、荷物を運んだり、お笑い芸人としてみんなを笑わせたりするなどして、島をより良い環境にして、100人が楽しく生きていくためのサービスを作ります。



さて、ここで質問です。

「この島にはまだ“お金”がありませんが、この島の100人はお金が無くても生きていけるでしょうか…？」

CHAPTER 1

3

どうやって分ける？

答えは「生きていける。ただし、住民全員が仲の良い家族のような関係だったら」です。

ちゃんとみんなで「平等に分け合える」なら、食料も家も日用品もサービスも人数分足りているので、誰かが飢え死にしてしまうことはないでしょう。

実際、お金が存在しなかった時代には、原始人たちは小さなグループで話し合って、みんなで仲良く分け合いながら暮らしていたのですから。

しかし 100 人もいるとそうはいきません。問題が発生します。

「もっとたくさんイモをよこせ」

「あいつの家の方がいい。交換してほしい」

「あの人よりたくさん魚を獲ったのに、あの人と同じ服しかもらえないなんて不平等だ！」

などと文句を言う住民が現れはじめるのです。

このように人数が多くなってくると、みんなで食料や家や日用品やサービスを、仲良く分け合うことはだんだん難しくなってくるのです。

さらに、役割分担（仕事）を決めるのも大変です。

「100人分のイモを作るのは大変だから、もっと農家を増やして」

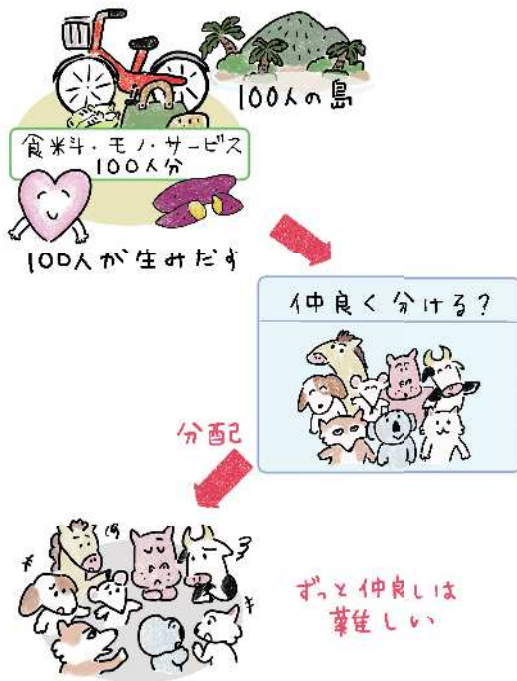
「職人は危険だからやりたくない。農家かサービス業をやりたい」

「ヒマなら町のゴミ拾いをやってよ」

「いつ誰が橋を作ってくれるの？」

仕事によって大変さが違いますし、また住民にとっての「必要度合い」も変わるので、それぞれの仕事を誰がやるのか、何人でやるのか、仲良く決めるのは困難です。

人数が多ければ多いほど、「資源や仕事をバランスよく分配する」



のは不可能に近くなります。

そこで住民たちはリーダーを選びました。

そしてリーダーが

「あなたは怠けていたので、イモを1個とボロボロの服」

「あなたはよく働いたので、イモを10個と素敵な服、ヘアカットもつけましょう」

と決めていくことにしたのです。

しかし、これでもうまくいきません。

リーダーが良い人だとは限らないからです。

住民たちから集めた食料・モノ・サービスを、

「自分の得」あるいは「自分が好きな住民にとって得」

になるように分配するかもしれません。

また、リーダーが良い人だとしても、住民が100人もいると、リーダーは全員の「がんばり度」を正確に把握することはできません。

「隣の畑よりおいしいイモを作ったのに」「壊れにくい椅子をたくさん作ったのに」「島で一番面白い物語を作ったのに」と不満も出てきます。

100人は話し合いました。

そしてついに全員の損得を調整してくれる、「システム」を開発

しました。

そのシステムさえあれば、食料・モノ・サービスを平等に分配できる。仕事の役割分担もスムーズにできるようになる。そしてみんなが暮らしやすくなる。そう期待しました。

さて、このシステムとはどういったものなのでしょうか？

